

黄檗僧念仏獨湛の著作

田中実 マルコス

【抄録】

江戸時代初期に隠元と共に来日した獨湛は、のちに黄檗山萬福寺第四世となる。作福念仏図を用いて念仏教化をしたところから念仏獨湛ともよばれる彼は、中国禅浄双修の流れを汲みながらも、日本浄土宗の高僧たちとも交流をもち、多くの著作と絵画を残している。その著作は語録と伝記に大別することができる。それらを蒐集し全集とした上で本稿では各著作に解題を付し、また若干の考察を加え、獨湛研究の基礎作業とした。

キーワード：獨湛、黄檗宗、隠元、禅浄双修

黄檗宗萬福寺開山隠元は清の順治十一年、江戸の承応三年（一六四五）六月二十一日、弟子と諸種の職人三十人と共に厦門を出航し、翌七月五日に長崎に着き来日、約二十年の後半生

を日本仏教のために尽す。同伴した弟子の中で萬福寺の第四世となった獨湛は、浄土宗や西山浄土宗の僧と交流し独自の業績を残した。獨湛は数多くの著作と絵画⁽¹⁾を残している。その著作は語録類と伝記類に大別することができる。ここではその各著作に解題を付し、また若干の考察を加えておきたい。

○語録類

獨湛の語録として現存しているのは、『初山獨湛禪師語録』一卷、『黄檗獨湛禪師語録』九卷、『梧山舊稿』四卷、『獨湛和尚全録』三十卷、『當麻寺化佛織造藕絲西方聖境圖説』一卷、『開堂法語』一卷、『授手堂浄土詩』一卷、『初山勵賢録』一卷である。⁽²⁾

それらの著作を概略紹介すると次のようになる。

①『初山獨湛禪師語録』一卷（刊本）

浜松市立中央図書館所蔵。外題は『獨湛録』であるが、内題は『初山獨湛禪師語録』。寛文七年（一六六七）刊で、七十四丁の書籍である。駒沢大学図書館にも『初山獨湛禪師語録』を外題として所蔵されている。また同じ内容で刊行年も同じものが長崎歴史博物館に所蔵されていて、外題は『獨湛禪師語録』となっており、一卷を四巻に分割したものである。待者の道越の記録によるものであり、両本の刊記は同じもので次のようである。

護法弟子近藤登之助法名性訥捐資敬刻

初山和尚語録壹卷伏願見者聞者菩提心而不退般若智

以現前者

寛文七年丁未年仲春穀旦識

この刊記によるとこの書籍の題名は『初山和尚語録』で一卷本、近藤登之助（貞用、語石居士）（一六〇六〜一六九六）によって刊行されたものである。この語録の内容は獨湛が初山寶林寺での法話を侍者天岩道越（一六六六〜一七二七）が記録したものであって、上堂、小參、曹溪玄流頌、法語、小佛事、讚書問、銘、詩偈という構成になっている。

②『初山勵賢録』一卷（刊本）⁽⁴⁾、獨湛編集

駒澤大学所蔵。刊記がないため刊行年は不詳であるが、冒頭に獨湛の叙が置かれ、その叙の末に「昔 龍飛已酉歲十一月冬至日 初山沙門獨湛瑩識」とあるので一六六九年に叙を書いたことがわかる。それは次のようなものである、

禪一餘闕下テ近代ノ雜書并ニ護法録塔ノ銘傳一記上ヲ無ク論ニ縮一素男一女ヲ但取下其ノ入一道辛一勤ノ之行堅勇發一悟之由上ヲ若ニ語句機縁一始一終事一跡皆ナ略ス焉録一既ニ成ス篇ヲ置ニ於座一右ニ一回過レ目ヲ激ニ發シ、心神一感一慕ノ思フトキニハ齊シトハ則レ怠一頑ノ之習不レ遣而去シ矣因テ名ト曰フ勵賢録一與ニ禪關策進一相ニ為ス表裏一但彼レ所レ載スル皆ナ唐宋ノ古一徳此レハ則チ近代ノ時一人當レ知一古一今一ノ人ト末ニ嘗テ不レ同ラ特ニ患レ無ク志シ耳是レ余カ自勵シ勵シムルノ人ヲ之素懷ナリ也

つまり、参禪の寸暇に近代の書籍、法語、塔銘、伝記などに目を通して、僧俗、男女を問わず、ただ仏道修行に精進する姿の堅固さ勇猛さ、仏法体解の由来などの記述を取りだした。語句をめぐる因縁のようなところ、事跡の始終は全て略し、編集して刊行した。座右に於いて一通り目を通して心を奮い立たせ、仏道修行に感慕して、斉しからんと思ふときには、懈怠の習慣

を排除して行くことができる。だからその主旨に基づいて『初山劬賢録』という。『禪關策進』と表裏一体するものである。だが『禪關策進』は唐と宋の古徳の教えをあつめたものである。近代の人はそうした古徳の教えを知るべきである。それというのも古今の人の心は同じとはいえず、中でも道心がない点をただ心配するからである。これによって私も自分を励まし、また人を励まそうと心底より願うからである。

③『開堂法語』一卷（刊本）⁽⁵⁾

萬福寺所蔵。内題は『黄檗第四代獨湛和尚開堂法語』で、獨湛の弟子龍門道懐が記録したものである。黄檗文華殿所蔵本には刊記がなく、発行年代は不詳。この書の冒頭には次のようである。

天和辛酉元年仲冬朔旦。師在遠州指初山寶林禪寺。受本山黄檗萬福禪寺請。於二年壬戌正月十四日入院至

つまり、浜松の初山宝林寺に居た獨湛が天和元年（一六八一）十一月一日に本山萬福寺の住持に推戴され、その翌年の正月十四日に晋山した時の法語を記載したものである。

④『施食要訣』一卷（刊本）⁽⁶⁾ 初山獨湛撰

駒澤大学図書館本は天和三年（一六八三）の刊行である。構成はまず獨湛の序、本文、最後に天和二年（一六八二）の石麟道新の跋がある。本文の内容は、「鄭所南施食心法」、「背盟惡報記 雲棲大師撰」、「竹窓施食師」⁽⁷⁾、「平心薦亡 出竹窓集」⁽⁶⁾、「唐皎然畫傳 略出」、「夷堅志 宋翰林洪邁著」、「遵式施食法」、「鄭所南施食心法」、「鷄鳴寺施食臺紀 明釋道果撰」と「水陸施食忌男女混亂褻賣聖賢衝突鬼神說 雲棲大師集 出竹窓集」⁽⁹⁾となっている。

⑤『當麻曼陀丸塔宝引』一卷

愛知県岡崎市清涼寺所蔵。巻物。寸法は長三〇九cm幅三二cm。元禄十一年（一六九八）六月十四日、獨湛が當麻曼陀羅から散った糸くずなどを集めて丸の形にして宝塔に収めた経緯を六〇〇字で著したもの。

⑥『當麻寺化人織造藕絲西方聖境圖説』一卷（刊本）⁽¹⁰⁾

京都法然院所蔵。（元禄十四年（一七〇二）版）内題には「日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起説」とあり、刊記には「元禄十四歲次辛巳十二月十四日 洛東華頂沙門義山募縁」とある。⁽¹¹⁾ 図版六葉入りで、最初に中国杭州の慈雲統法（一六四一）

一七二八)の引文を記載して六枚の絵を載せ、その後に記が二通、共に獨湛述で悦峯(一六五五)一七三四)が記録したものである。この記述は獨湛と悦峯との合作であると言える。悦峯は獨湛の法弟で、長崎興福寺の中興三代住持、黄檗山萬福寺第八世である。「縁起説」には中將法如の藕絲織傳説を主とし、後年の鶴山の哀話も取り入れている。

⑦『授手堂浄土詩』一卷(刊本)⁽¹²⁾

法然院所蔵。内題が『初山獨湛和尚授手堂浄土詩』となっている。弟子の天麟道仁(元禄八年(一六九五)九月九日嗣法)と紫玉道品(元禄七年(一六九四)九月九日嗣法)が編集したもので、刊記によると元禄十六年(一七〇三)に無塵居士が刊行した書籍である(獨湛七十六歳)。冒頭に獨湛が延宝八年(一六八〇)の序を寄せている。浄土教関係の詩七十首を収めている。『授手堂浄土詩』の後に『安養檀詩』が附され一冊となっている。『安養檀詩』も浄土教に関連する二十五首の詩を収めている。また末尾には「発願文」と「十六観讃」が附されている。

⑧『梧山舊稿』四卷(刊本)⁽¹³⁾

駒沢大学図書館所蔵。内題は『獨湛禪師梧山舊稿』。刊記が

ないため刊行年は不詳。獨湛が梧山積雲禪寺に居た時の語録であり、自序に述べているように、獨湛が十六、七歳の時に出家してから、隠元に出会うまで、つまり二十四歳までの期間の語録である。この語録は侍者の龍門道懐が記録したものである。構成は巻一にまず自序があり、記、正宗頌、五宗贊、巻二に拈古、頌古三十二相頌、題贊。巻三に詩偈、巻四に詩偈という構成になっている。また道懐は延宝九年(一六八一)一月二十三日に獨湛に嗣法したが、獨湛は一六五四年に来日しているので『梧山舊稿』は日本で記録されて刊行したものである。

⑨『獨湛禪師語録』九卷二冊刊本

浜松市立中央図書館所蔵。(以下『九卷全録』)内題は巻一、二、三、四、七が『獨湛禪師全録』、巻五、六、八、九が『黄檗獨湛禪師全録』となっている。一卷から四巻までを一冊とし、五巻から九巻までを一冊とする体裁になっている。また各巻の題の後に「住東明山興福禪寺嗣法門人道章編」とあることから悦峰道章が編集したものである。黄檗堂文庫には『黄檗獨湛禪師語録』巻四(刊本)から巻七(一冊)が所蔵されている。内容は『九卷全録』の四巻から七巻までと同じものである。形式は異なっているが、各巻の題の後に「侍者道懐録」とあり、龍門道懐が獨湛の説法を記録したものとわかる。第五巻末尾に

は「侍者道懐龍門拜書」、第六卷末尾には「侍者道懐龍門拜書并助刻」とあるので、『黄檗獨湛禪師語録』は『九卷全録』の底本となったと考えられる。そして②の『初山獨湛禪師語録』の「上堂」の部分はこの『九卷全録』第一巻の内容と形態が全く同じであるが、②『初山獨湛禪師語録』は「侍者道越記録」とあり、「道越」は「道超」の誤りであろう。天岩道超の記録であることが分かるため、『九卷全録』の第一巻の底本は②『初山獨湛禪師語録』「上堂」の部分であると考えられる。

⑩『獨湛和尚全録』三十卷⁽¹⁴⁾

黄檗文華殿所蔵。(以下『三十卷全録』) 現在写本のみの存在が確認できている。

『槃宗譜略』巻中の「初山寶林寺獨湛瑩禪師傳」には「悦峯章一人成章等編¹⁴師ノ語録ヲ計ルニ三十卷法孫博雷音參訂焉¹⁵」とあるところから、悦峰が獨湛の語録三十巻を編纂したことが分かる。『槃宗譜略』は獨湛七十歳の時に編纂されたものであるため、三十巻の全録は獨湛の生前に編纂されたものと確認できる。全録の三十巻のうち十四巻から二十一巻と二十八巻が欠本であり、『三十巻全録』が刊本として上梓されたかは不明であって、伝記にあげられている『三十巻全録』は写本のことであらうと思われる。

内題について、巻一、二、三、四、八は『獨湛禪師全録』、巻五、六、七、九は『黄檗獨湛禪師全録』、十巻から三〇巻までは『獨湛和尚全録』となっている。

第三十巻の最後には、

圓通成、香山圓、石麟新、丹岬昶、平石樹、無住立、
石窓鏗、天瑞恩、龍門懷、化霖龍、大梁健、古鏡明、
智觀照、霄外丹、百非寛、喝岩震、梅関香、天洲充、
泰洲香、石芳瑞、如幻超、海岸崇、天岩超、朗山耀、
廓堂達、巨道開、法源印、悦峰章、雲岳高、桂堂昌、
慧雪智、紫玉晶、天麟仁、大方廣、温然玉、蓮洲清、
成山起、太玄通、巨海光、天章奎、雲庭安、默外説、
黄玉温

と編纂に関わった四十三人の名前をあげているが、この四十三人の中の三十九人は獨湛の直弟子であるが、四人（梅関、慧雪、巨道、如幻）は不明である。

『三十巻全録』の第一冊には目次が記載されているが、この目次に基づくならば、『梧山舊稿』と『初山獨湛禪師語録』によって『三十巻全録』では欠本となっている部分の一部を補うことができる。また『全録』であるので獨湛著作のすべてを収

集しているはずだが、現存する『三十卷全録』に見当たらない記述が他の語録に多くあるので、それらの記述は『三十卷全録』の欠本となっている本に記載されていたと推定できる。

この他、獨湛は自らの著作以外にも序や跋を寄せている。その中に中国明代の袁了凡（生歿不詳）の著作で、日本においても江戸時代に広く流布した『陰騭録』⁽¹⁶⁾がある。忍激は元禄十四年（一七〇一）に『陰騭録』と株宏（一五三二―一六一二）の『自知録』を合冊して刊行している。獨湛はそれに序を寄せ、跋は忍激が書いている。⁽¹⁷⁾

○伝記類

獨湛の伝記類としては『永思祖徳録』二卷、『皇明百孝伝』一卷があり、往生伝としては『扶桑寄帰往生伝』二卷、『近代諸上善人詠』一卷がある。

①『扶桑寄帰往生伝』⁽¹⁸⁾初山性瑩獨湛輯二卷（刊本）

佛教大学図書館所蔵。本書は獨湛が先行する往生伝を参考にして編纂したものである。獨湛が渡来後に知見した往生人一九四人の略伝が収録されている。各伝には賛が付されている。

『扶桑寄帰往生伝』の序文には次のように記されている。

寄帰傳者寄レテ此ヲ以歸ニ于震旦ニ也震旦舊有ニ往生傳一所レ載ル但中華ノ之人ニ未レ及ニ于徼外ニ也迨ニ雲棲大師ノ所ニ輯竟ニ得ニ烏菴國王ノ之一リヲ耳海東ノ諸書未レダ經ニ慈眼一ヲ以レ故ヲ日本諸往生ノ者皆闕レク採ヲ焉余來ニテ扶桑ニ已ニ經ニ二十餘年ヲ禪餘略展ニ和書ヲ見ル其ノ所ヲ載四輩往生ノ者甚夥シ乃隨レ筆ニ記錄シ并ニ近日見聞ノ之瑞ヲ共ニ得ニ二百餘人ヲ間有ニレハ要義一掲レルニ之ヲ以レス贊ヲ始レテ自ニ推古一終ルニ寛文ニ但其ノ間往生ノ人必多メ不レシ及ニ備ニ採ルニ姑ク存ルニ萬分ノ之一ヲ耳名テ曰ニ寄帰傳一ト豈ニ但補ニノミナランヤ支那傳記ノ之闕一ヲ有ル以テ見ニ西方金蓮国土即ニ在ニ滄海ノ之東ニ使ル一人ヲ知レテ所ニ感懷一ニ而發乙起ニ來朝ノ之願甲者ナリ矣

告

龍飛歲次ニ癸丑ニ臘月除夕

支那嗣祖沙門性瑩ル獨湛題ニ遠州初山方丈ニ⁽¹⁹⁾

すなわち、書名の「寄帰伝」とは、日本から中国にこの往生伝を送り届けるということである。それは中国で編纂された往生伝が中国人のみを載せていて、他国の人の往生伝がないからである。しかし例外的に雲棲株宏（一五三五―一六一五）の『往生集』⁽²⁰⁾卷之二にはただ一人、中国人でない人物「烏菴國王」⁽²¹⁾が収録されている。『海東高僧伝』⁽²²⁾なども新羅の人のみの

伝記であるため、日本の往生人の記述は見当たらない。私（獨湛）は日本へ来て二十余年が経った。その間和の書を読んだが、そこに載っている四輩の往生の記述は夥しい数である。それらを記録して、更に近年に見聞した者も挙げると二百余人を集めた往生伝になった。時々、要義があればそれをあげるために賛を付した。この往生伝には推古天皇から始まり寛文の時期までの往生人を紹介した。この間の往生人は多いが、ここに採録した者はその万分之一に過ぎない。この往生伝を中国に送り届けて、中国の往生伝の欠を補うのみでなく、西方金蓮国土（の信仰）が滄海の東（日本）にもあることを見て、人々に私心が心に懐いているところを知ってもらい来朝の願いを起こさしめんとしたものである。この序は獨湛が一六七三年に初山宝林寺（静岡県浜松市）で記したものである。

『扶桑寄歸往生伝』の構成は上下二巻からなり、上巻には沙門往生類九十人（うち中国人一名）の伝記が収載されている。下巻には皇帝往生類に五人、皇后往生類に二人、皇子往生類に三人、臣僚往生類に二十六人、尼僧往生類十五人、士庶往生類二十九人（うち中国人一名）、婦女往生類二十六人（うち中国人四名）、以上、八類一〇七人の往生人が収載されている。収載した往生者の数は他の往生伝に比して多いが、紀年を欠く者も多く、個々の伝記も簡略である。史料としては不備といえる。

江戸時代の紀年が記されている往生人は十八人で、全体の一割弱にすぎないが、その往生地は獨湛の行動範囲ともいうべき、近畿・東海地方に集中している。この中で獨湛の来朝後（順治十一年（一六五四）に没した往生者が十六人で大部分を占め、中でも寛文中の往生人が十四人と多く、獨湛が隠元のもとから離れて浜松の宝林寺に晋山してからの者は十人におよぶ⁽²⁴⁾。

沙門類、皇帝類、皇后類、皇子類、臣僚類、尼僧類の各々の列挙順についていえば、前半は『元亨釈書』⁽²⁵⁾を典拠として、後半は『日本往生極楽記』⁽²⁶⁾、『続本朝往生伝』⁽²⁷⁾、『撰集抄』⁽²⁸⁾を典拠としている。序文によれば、本書は延宝元年（一六七三）十二月、初山宝林寺において完成をみた。先学の指摘にあるようにこの時期までに開版されていた往生伝といえば、『日本往生極楽記』一卷（寛文九年、延宝二年）、『続本朝往生伝』一卷（万治二年・延宝二年）などの古代往生伝のみであったから、本書が近世に新たに編纂された往生伝の先駆的な位置を占めているといえる。ただし本書の版行は獨湛没後まもなくの宝永三、四年であり、世に出る順番としては元禄二年（一六八九）に『念死念仏集』の著者、知空唯称の弟子の壬生安養庵了智によって上梓された『緇白往生伝』三巻に次ぐこととなった⁽²⁹⁾。

②『永思祖徳録』⁽³⁰⁾ 雲孫沙門性瑩獨湛輯 四卷（刊本）

駒澤大学図書館所蔵。延宝五年（一六七七）に獨湛が寄せた序がある。

本書は陳族つまり獨湛祖先の家系をまとめたもので、各人の略歴を記し、次にその人徳に対しての贊を付すという構成になっている。大丞相陳俊卿を始め、陳族の六十四人の略伝をあがっている。獨湛はこの陳族の子孫にあたる。

獨湛の両親に関して次のように記述されている。

陳衮明 希振公⁽³¹⁾之子附妣黃氏係金沙兄弟進士東山公會女孫也

祖諱衮明。字翊宣。博學善書。安_レ貧不_レ仕。純靜無為。平懷接物。不驕不諂。至信至誠。有_二君子徳_一。有_二古人風_一。事_レ親至_レ孝。調_二養藥石_一。扶_二掖追隨_一。從_二游負篋_一。皆不_レ辭_二勞倦_一。年愈久慕_レ深。妣黃氏亦孝敬承順。遇_三親病_二甚危_一。醫治不_レ効。乃禱_レ天請_レ代。復割股肉煮_レ糜以進。病乃愈。隱_レ徳密行。人無_レ知者。⁽³²⁾

すなわち、父翊宣は博學で、書に巧みであり、貧に安んじ、誰に仕えることもなかった。もの静かで人爲にとらわれることなく、穏やかな気持ちで人に接していた。奢らず、諂うことな

く、誠実で君子の徳があり、昔の賢人の風貌があった。親に仕えては孝を尽くした。薬を整え、親の後を追っては助け、荷物を背負っては付きそうようにし、その労を厭わなかった。そのように親に尽くすことは年とともに更に深まった。一方、母黃氏もまた親孝行の人で、親をよく敬い従っていた。いつしか親が重い病を患い、医師の手では助からない状態となった時、天に祈って、身代わりとなることを請い、自分の割股の肉で粥をつくり親に食べさせたところ、親の病は治った。その徳を隠した密かな行いを人々は知らない。この伝記から、獨湛の両親は儒道の徳を備え、欲に長けることなく、孝を尽くし、名譽に拘ることもなく、質実な暮らしぶりをしていたことが分かる。

この『永思祖徳録』は獨湛の祖先六十四人を紹介した後、墓や寺等を紹介し、それらを讃える二十八字の偈を添えている。すなわち「祖蹟八咏」や、獨湛が祖先の堂や碑を建立するに当たってつくった「慕巖禳偈」、及び「報恩堂安座上堂附」がそれである。その中「報恩堂安座上堂附」は次のようなものである。

祖丞相公封_二魏國公_一諡正獻暨_二狀元公御史公_一貢元公翊宣公神像木主入_二祠廟_一上堂。

乃云歷代先公本大儒。有_レ孫入_レ釋事_二浮屠_一。還源報本情未_レ盡。忍_二看林間_一返_二哺鳥_一。祇樹園中崇祠宇。四時芹

藻獻^三神圖^一。如^レ狂^三中堂^二類^二陟降^一。豈還^二袍笏^一更^二朝趨^一。不^二孝其昌^一幼時將^二出家^一。族中叔父等。咸以^レ背^二祖亡宗^一責。是時不^レ能^レ釋以^レ至^レ理。竟爾逸去。方外三十餘年。每懷^レ像^レ像^レ主。隨^二禪室之思^一焉。甲辰入^二初山^一。始建^二大雄寶殿^一。次建^二報恩祠堂^一。奉^二先公諸像^一。以^レ表^二絕學^一。不^レ棄^二明倫^一也。蘋蘩奉獻。無間歲時。現^二前龍象衆等^一。當觀此雖瑩先人祖父。實忠孝廉節名臣。行業詳載^二干諸史^一。庶幾欽風慕^レ德。易地取裁。朝入^二梵王宮闕^一。高標及^二第心空^一。是名^二通方禪流^一。得^二乎設^レ像寓意之旨也。下座⁽³⁴⁾

これは獨湛が家系の始祖に当たるところの状元公や、御史公という官職、更には丞相という最上位の官職まで務めた俊卿正獻公、そして祖父の貢元希振公及び父の翊宣公の尊像と位牌を祠廟の殿堂に祀った時の説示である。すなわち、歴代の先祖は皆もともとすぐれた儒学者であったが、その孫に当たる獨湛は寺に入って佛に仕えた。しかし出自への報恩は未だ不十分であった。林の中でじっと息をひそめていると、小鳥でも成長すれば、養ってもらった親鳥に育ててくれた恩を返しているのではないか。⁽³⁵⁾そこで祇樹園の中にある祠宇（やしろ）を崇め、四時にすぐれた祖先の肖像にお供えを献上した。政治を行う中枢部

が乱れてしまった場合は、出退が頻繁になるが、袍（上着）と笏を還してしまえばどうして朝から奔走する必要があろうか。獨湛は、孝を積み重ねることなく幼い時に出家しようとしたが、陳族方の叔父等は、みんな獨湛が祖先の心に背くことを責めた。獨湛はその時、出家の道理を積明することができず、ただ故郷を去っただけであった。すでに出家してから三十余年、いつも祖先の像に思いを托して祀りながらも、仏道場への思いに随順していた。甲辰（一六六四年）に初山（浜松宝林寺）に入り、まず大雄宝殿を建立し、次に報恩祠堂を建立して先祖の像を奉り、仏道を成就したが、人倫の道を棄てなかった。粗末ながら供え物の奉獻は年中絶やすことはない。そこには高德の人たちが現前する。私はきつと先人や祖父を観るにちがいない。彼等には実に忠孝、廉節（節操）な名臣であった。その行業は諸史の中に詳細に記載されている。請い願うことはそのつつしみ深い徳風を敬い慕うことである。私は立場を替えて仏教者として判断する。いったん梵王宮に入れば、その高き目標は果てしなく広がっていくそれを「通方禪流」（禪流を十方に通達する）と名づけた。諸像を設けたことは、以上のような思いがあつてのことである。

この『永思祖徳録』が各先祖の略伝だけでなく、それに「贊」を付していることは、たとえば株宏の『往生集』などを



表



裏

獨湛先祖の位牌

範としているのであろう。

獨湛の宝林寺内報恩祠堂建立趣意書には出家者といえども孝を軽視するものではないという中国仏教者の心根が、仏教東伝のために遠く故国を離れているがために一層深く表明されている。

獨湛は報恩堂を建立して祖先である陳家の位牌⁽³⁶⁾を安置した。

獨湛は宝林寺の開山を隠元としているが、現在、報恩堂には中央に隠元の像が祀られ、向かって左側に宝林寺を開基した近藤登之助貞用家の位牌が祀られ、右側に陳家の位牌が祀られている。中国仏教における出家者の孝の問題についてはすでに先学の

論攷がある。禅と浄土念仏を修した智覚禪師延寿(九〇四〜九七五)は『萬善同歸集』巻四において『賢愚經』を引用し、「出家在家は慈心をもって孝順せよ。父母を供養するはその功德を計るに殊勝にして量り難し。その故は過去世における孝養の功德は、この世にあって上は天帝となり、下は聖王となり、成仏に至る。これみなこの孝養の福田によるのである。」⁽³⁷⁾と述べている。宋丞相無盡居士張商英述(一〇四三〜一一二二)の『護法論』には「古語有云。一子出家九族生天哉」⁽³⁸⁾とある。つまり一子が出家すれば九族が天に生まると言われていたのである。雲棲株宏も『竹窓三筆』に「出家利益」⁽³⁹⁾に「俗に恒に言うことあり、曰く一子が出家すれば九族が天に生まると。これ皆出家を贊嘆するなり。しかし未だあきらかに出家が何故に利益があるのか、その理由を知らない」と述べている。同じ語句は同じ著作の「出世間大孝」にも引用され、僧となった者は宜しく父母に孝をなすべしと述べている。また『緇門崇行録』⁽⁴⁰⁾の第四章では「孝親之行」という一章を設け、沙門となっても親に孝を尽くした十二人の孝僧の伝をあげている。真福寺に所蔵されている『往生浄土伝』⁽⁴¹⁾巻中の尼道香伝には「一子が出家すれば七世の父母は皆悉く苦を脱す」とある。普度(一三三〇)の『蓮宗宝鑑』巻一には「念仏は諸法のようにであり、孝養は百行の先となす。孝心はすなわちこれ仏心であり、孝行は仏行で

ないものはない。得道して諸仏と同じになろうとすれば、先ず二親に孝養しなければならぬ。故に隨禪師はいう、孝の一字は衆妙の門なりと。仏語は孝を以て宗となし、仏教は孝をもって戒となす」と述べ蓮華勝会という念仏結社を創設した宋代雲門系浄土念仏者宗蹟⁽⁴²⁾の「孝養父母」の一節を引用している。⁽⁴³⁾

獨湛は一幅の軸に両親の絵を描き、次のような偈を添えている。

負米図

捧^レ檄無^レ歎 負^レ米ヲ竊^{カニ}歎^ク 不^レ待^二吾^一親^ヲ

將^二何^一酬^報 百卷ノ墨^經ハ 怡^ス親^ヲ至^宝ハ

写^二出^シ哀情^一 音容如^シ在^ルカ

つまり、(親の)手紙を胸の前でうやうやしく捧げ持っても喜びはない。親孝行をしようと思っても、わが親は既に亡くなっていて待ってはいないことをひっそりと嘆く。一体何を以って報恩とするのか。墨書した經典は親をよるこぼす最高の宝である。そこには哀切の情をこめて写経すると、まるで(親の)声と姿がそこにあるようであると述べている。つまり獨湛は出家したために親孝行していないことを悔い、

亡くなった両親の報恩のために写経した。なぜならば、それが親の心を穏かになごませ、よろこばせることのできる宝であるからだというのである。標題の「負米」とは孔門十哲の一人である子路が親のために米を百里も背負ったという故事に由来する。獨湛は出家前に叔父等から、出家は先祖に背くことであると言われていたので、出家後も報恩の問題の解決が胸中に留まり続けていたのである。⁽⁴⁵⁾

③『皇明百孝伝』黄檗性瑩集一卷(刊本)

京都大学付属図書館所蔵。『皇明百孝伝』は獨湛が編集したものである。序には「壬戌九月四日莆田古鰲峰沙門 黄檗獨湛叙」とあるから一九八二年にまとめられたものである。序の冒頭には次のようにある。

天ノ之賦^二斯^一民^一也本^ト有^二孝順^一之道^一根^二於^一心^一故孩提^ノ之童無^レ不^レ知^レ愛^二其^一親^一佛^ノ之説^二諸^一經^一也。⁽⁴⁷⁾

つまり、天が人民に与えたのが孝順の道である。その孝順の道は人々の心に根ざしているものであるから幼児でも親を愛することを知らないはずはなく、仏もそれを諸経の中で説いているとし、この伝記編纂の意図を述べている。

『皇明百孝伝』の構成はまず、獨湛の序があり、そして百四十一人の伝記を記し、末尾に獨湛の法嗣である悦峰（一六五五～一七三四）の跋がある。この伝記には中国明時代の中国人百三十八人の略伝を集載している。そして附として一人清時代の伝記が収められている。ところで雲棲株宏が明代の名僧の行実及び語録を略抄して輯録したものが『皇明名僧輯略』⁽⁴⁸⁾である。株宏が『皇明名僧輯略』に出家者の伝記を集めているので、獨湛はそれを範として『皇明百孝伝』に孝を尽くした在家者の伝記を集めたと考えられる。

④『近代諸上善人詠』道品道仁編一卷（刊本）

東北大学付属図書館所蔵。『近代諸上善人詠』は獨湛が収集した初山宝林寺周辺の往生人に関する記事を獨湛没後に弟子の隣道仁と紫玉道品が編集したものである従って他の往生伝には見られない往生人ばかりである。無塵居士の跋によると宝永三年（一七〇六）に無塵居士自身が刊行を志し、獨湛寂後に刊行されたものである。冒頭に獨湛の法姪（木菴の弟子）である道宗悦山（一六二九～一七〇九）が次のような序を記している。

題「獅子林湛大和尚諸上善人咏」

和尚自参学以来。禅浄双修度二人無数^一。及年既邁。不^レ

退^二初心^一。聞^レ有^下修^二浄土^一者。生^三浄土^一者^上。俱喜而不寐。可^レ知^二和尚^一。是古之永明。今之雲栖也。其日本近代諸上善人咏。若干人。并附捨命易者。若干人。人人各咏。厥功偉矣。茲有^二施主^一。題^二梓行世^一。索^二予欲得^一。故^二不揣才拙^一。以^レ応^二其命^一。
黄檗法姪道宗悦山敬書⁽⁵⁰⁾

つまり、本書の表題を『獅子林湛大和尚諸上善人咏』とする。獨湛は参学を始めて以来、禅浄双修で多くの人々を済度した。年を追っても初心が退転することなく、浄土の行を修する者、浄土に往生する者があることを聞いてはともに喜び臥して休むことがなかった。禅浄双修は古くは、永明延壽（九〇四～九七五）⁽⁵¹⁾、昨今では雲棲株宏（一五三五～一六一五）が行っているが、ここでは日本近代における諸の上善人の詠として若干名、そして捨命易者を若干名あげ、各々その偉功を詠おうとした。この書物に表題を付し施主の尽力によって上梓するに当り、私に序を求められた。それに応えうる才の者ではないけれども命に応じたのである、と述べている。

諸上善人の部には日本人六十七人の往生伝が収載され、各末尾に二十八文字の詠が付され、六十七人の伝記の後には「捨命易者」として三十一人が附されている。

ところで臨濟宗楊岐派の道衍（一三三五～一四一八）はインド人と中国人あわせて一二二人の往生者の略伝と、各略伝の冒頭に七言四句の賛を付した『諸上善人詠』を著している。獨湛の『近代諸上善人詠』では記述形式からすれば逆に往生人の略伝の後に二十八文字の賛を付している。獨湛はこの伝記を著す際に道衍の『諸上善人詠』の形式を参考にしたことが考えられる。

○獨湛関連著述

⑫『獨湛和尚念佛會文』⁽⁵²⁾

法然院所蔵。『獨湛念佛會』⁽⁵³⁾は、『松橋正嫡保延記』、『相頓義』、『観念法門証略注』、『五経大全周易首卷河図洛書秘華』、『建仁寺布薩式』とが合冊になった写本である。表紙には中央に『獨湛和尚念佛會文』と書かれ、その左部に他の著作の題名が記されている。著者は不明、多少の虫食いがあるため全文は読めない。『念佛會』は七頁にわたって本文が記され、要所に割注を付し、朱色の返り点が施されている。

⑬『輓偈稱讚淨土詠』⁽⁵⁴⁾ 一卷（刊本）

大正大学附属図書館所蔵。獨湛が寂した際に諸僧がその死を

悼み輓偈を賦した。『輓偈稱讚淨土詠』の構成は、宝永三年（二七〇六）の井上玄桐の序、三十三人（僧三十二人と無塵居士）の輓偈と黄檗山萬福寺第七代悦山の四仏事法語、つまり鎖龕、掛眞、起龕と進塔からなっている。

註

(1) 拙稿「黄檗僧念仏獨湛の絵画に見る淨土教」、『佛教論叢』第五十六号二〇一二年）。

(2) なお『在家安心法語』一卷（四十五丁）。大賀一郎氏によれば、原本を初山宝林寺の蔵書で発見。漢文体で難読であるため黄檗山萬福寺第三十八世が俗語（和漢文）に改め、明治十三（一八八〇）年に出版したと述べている。しかし黄檗文華殿所蔵萬福寺文書（明治期）である『不用書』（表題の右側に「后日参考ノ為メ」、左側に「残シ置」とある）には本書について次のように記している。

出版御届

一 安心法語

壹冊中

明治十三年六月中出版

但し無販賣

右者私著述一宗之法義ヲ片假名交リニ開述仕候書ニテ一切條例ニ相背候儀無之候間今度出版致シ一派ノ道俗無料ニテ附與仕度此段御届申上候也

山城國宇治郡五ヶ庄村九百三拾一番地所

黄檗宗天聖院前住職

明治十三年六月十九日 著述兼出版人 大講義林道永

この出版届によると『在家安心法語』は刊記にもあるように

- 道永通昌（一八三六—一九一一）の著述であると記されている。従って『在家安心法語』は獨湛の著作ではなく浄土真宗の寺院に生まれ、明治十四年、四十五歳で黄檗山萬福寺第三十八代の住持となった道永の著作である。刊行年月日は道永が萬福寺の住持となる一週間前の日付となっている。
- (3) 一卷は一丁から十五丁まで、二巻は十六丁から三十八丁まで、三巻は三十九丁から六十丁まで、四巻は六十一丁から七十二丁までという組み立てになっている。
- (4) 『初山勸賢録』駒澤大学図書館所蔵。また浜松市立中央図書館の所蔵もある。『獨湛全集』第三卷二二九頁。
- (5) 『開堂法語』京都萬福寺所蔵。『獨湛全集』第三卷三九一頁。
- (6) 『施食要訣』一卷。駒澤大学所蔵。『獨湛全集』第三卷四一一頁。
- (7) 『竹窓三筆』（『蓮池大師全集』第四集「施食法」、三九八—三九〇頁）。
- (8) 『竹窓隨筆』（『蓮池大師全集』第三集、三六六—〇頁）。
- (9) 『竹窓三筆』（『蓮池大師全集』第四集、四〇〇—〇頁）、『竹窓三筆』（『蓮池大師全集』第三集、三七一—七頁）。
- (10) 『當麻寺化佛織造藕絲西方聖境圖說』は京都萬福寺、大谷大学と佛教大学所蔵に文化六年刊行本が所蔵されて外題は『翻刻當麻図記』となっている。『獨湛全集』第三卷三〇三頁。
- (11) 『當麻寺化佛織造藕絲西方聖境圖說』は、初刊は元禄十三年（義山本）、そして元禄十五年（支那本、寛政十一年（寛政本）、文化六年（文化本）と明治十九年（明治本）全五回刊行されている。大賀一郎稿『黄檗四代念佛禪師獨湛について』（『浄土学』十八・十九号）参照。
- (12) 『授手堂浄土詩』京都法然院所蔵。『獨湛全集』第三卷三四五頁。
- (13) 『梧山舊稿』駒澤大学図書館所蔵。『獨湛全集』第三卷一頁。
- (14) 『獨湛和尚全録』三十巻京都萬福寺所蔵。『獨湛全集』第二卷。
- (15) 『槃宗譜略』巻中三十四右。駒澤大学所蔵。『獨湛全集』第四卷五二九頁。
- (16) 西田耕三著『近世の僧と文学——妙は唯その人に存す——』参照。『陰隲録』は儒佛道の三教合一の思想を説く道德の書物である。陰隲とは天が冥々のうちにあって人民を安定させるということである。石川梅次郎著『陰隲録』（中国古典新書、明德出版社）、西澤嘉朗著『陰隲録の研究』（八雲書店）参照。日本で『陰隲録』は広く流布され、『和語陰隲録大意』まで刊行された。これには明治十九年十一月、清浄華院第六十四世安譽貫務の序があり、本書末尾には明治十九年十二月、洛陽五條坂喜雲寺第二十一世崇地隆雲の跋があり、一千部施与のために刷られたことが記されている。尚、本文の末尾には「洛東西光律寺蔵版」と原本の所在が示されている。この『和語陰隲録大意』は諦忍の『卒塔婆用意鈔』と合冊になっている。（佛教大学図書館所蔵）。
- (17) 『自知録』は萬歴三十二年（一六〇四）の序によれば『陰隲録』を粉本としているとある。従って両本が同内容のものであるため合冊として忍澂が刊行したと考えられる。（酒井忠夫稿「株宏の自知録について」、『福井博士頌寿記念 東洋文化論集』所収）。
- (18) 『扶桑寄帰往生伝』佛教大学図書館所蔵（西谷寺文庫）（宝永丁亥（四）歳孟夏月 文富堂田宗移續梓）。
- (19) 『扶桑寄帰往生伝』巻上一丁右—二丁右。『獨湛全集』第四卷五頁—七頁。
- (20) 『往生集』全三巻東晋から明までの往生者の伝記を集めたもの。『大正蔵』第五一巻一—二六頁b—一五三頁a。
- (21) 烏菟國王について株宏『往生集』巻之二に「王臣往生類」中

にある。(『大正蔵』第五十一卷一三八頁)。赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』七〇〇頁には出典として『法顯伝』、『大唐西域記』三があげられている。諸橋轍次『大漢和辞典』には印度の国の名。Udyanaの音訳。印度カシミールの西北とある。

- (22) 『海東高僧伝』京北五冠山靈通寺住持教學賜紫沙門(臣)覺訓奉宣撰とあり、現在二巻のみ現存。韓国最古の僧伝であり、流通一之一と一之二のみが現存し仏教を朝鮮半島に伝えた高僧の伝記が載せられている。(『大蔵経全解説大辞典』参照)、『大正蔵』第五十巻一〇一五頁a〜一〇二三頁a。

- (23) 『扶桑寄婦往生伝』の序には飛鳥時代の推古天皇(在位五九二〜六二八)から始まり、江戸時代の寛文年間(一六六一〜一六七三)に至る往生人を収載したとある。しかし推古天皇の伝記は見当たらない。聖徳太子の伝記をあげることによって推古とは人物ではなくその時代を表したと考えられる。

- (24) 長谷川匡俊著『近世浄土宗の信仰と教化』三八〇頁〜三八二頁。伊藤唯真稿「往生伝と浄土伝燈の史論 解説」(扶桑寄婦往生伝 二巻)『統浄土宗全書』第一七巻所収を参照。

- (25) 『元亨釈書』三十巻(虎関師鍊著一二七八〜一三四六)(『新訂増補 国史大系』第三十一巻内)。

- (26) 『日本往生極楽記』一卷(慶滋保胤著(九九七))『統浄』第十七巻一頁〜一六頁。

- (27) 『統本朝往生伝』一卷(大江匡房著(一〇四一〜一一一一))『統浄』第十七巻 一七頁〜三二頁。

- (28) 『撰集抄』作者不詳西行(一一一八〜一二九〇)に仮託された説話集。九巻からなり神仏の靈験、寺院の縁起、高僧、往生、発心遁世等の一二一を載せる。

- (29) 長谷川匡俊著『近世浄土宗の信仰と教化』参照。

- (30) 『永思祖徳録』、黄檗文華殿所蔵。刊記には「黄檗版其他諸経

印刷発売元 京都市上京区水屋町通二条下ル 一切経 印房武兵衛」と記されている。(『獨湛全集』第四巻二六一頁)

- (31) 希振(陳昇)の伝記には「丞相応求公(陳俊卿)之後」と記述がある。

- (32) 『永思祖徳録』下巻二一丁〜二二丁(黄檗文華殿所蔵)、『獨湛全集』第四巻三四頁〜三六五頁。

- (33) 『二十四孝』に「割股療親」の記述があり、自分の股の肉を割いて病の親に捧げることが親孝行であると述べている。人間の肉が薬であることは中国明時代の『本草綱目』という医学の書物にも出る。

- (34) 『永思祖徳録』下巻二八丁(黄檗文華殿所蔵)、『獨湛全集』第四巻三七七頁〜三七八頁(原文は返り点なし)。

- (35) 返哺は、小鳥が幼時養われた報恩に食を親鳥に与える。古来より鳥が返哺の孝ありという。『十六国春秋』「鳥有返哺之義」必有「遠人感恵而來者」。『梁武帝 孝思賦』「靈蛇銜珠以酬徳慈鳥返哺以報親」(諸橋轍次『大漢和辞典』第七巻三九六頁)。

- (36) 獨湛祖先の位牌には次のように記されている。
(表)

有徳長者振宇府君神主

邑岸増廣生外祖考若水府君妣西漳曾氏神主

詔賜冠帯竹軒府君神主

賜進士授戸科給事中繼之府君神主

舉明經陞徵川知府士淵府君神主

都御史遠揚府君神主

賜進士官右布政使士渠府君神主

賜進士官兵部郎中士遠府君神主

賜進士官都御史時周茂烈府君神主

賜進士官南京刑部郎千石溪府君神主

賜進士官南京史部尚書加太子少保時英府君神主

辭元詔卜隱黃石祖府君神主

監進奏院遷軍器監簿直秘閣宓公府君神主

賜進士官德安太守仲論府君神主

大相封魏國公諡正獻諱府君神主

狀元及第官參知政事諱文龍府君神主

累舉大對辭迪功郎平甫府君神主

賜進士官員外愚庵府君神主

解元會元官戶部主事掌史館附一員外中公府君神主

賜進士官南京太常寺少卿愧齋府君神主

賜進士官南京兵部侍郎玉柔府君神主

賜進士官侍講時顯府君神主

大待贈愧府君神主

明經貢魁顯祖考希振府君妣洪氏楊氏神主

顯孝逸士翊宣府君妣慈惠金沙黃氏孺人神主

孝廉石公社君神主

都奇

雲孫其昌瑩奉祀

(裏)

逸士翊宣府君

明經貢元希振府君

大待贈愧愚府君

司徒家屈愚伊菴府君

清朝褒寵用中音驪諸祖府君

辭朝詔卜隱黃石祖府君

累舉大對賜迪公即平甫府君

丞相里第祠封魏國公諡正獻祖應求君

宋忠薰祠祖靖府君

唐遠祖莆田令邁公暨顯川堂上歷代宗親祖此主

宋郡王祠祖公進公

監進奏院直秘閣復齋府君

二忠祠祖文龍祖瓚二府君

二烈祠祖繼之祖彥回二府君

賜進士官御史孝廉祠祖時周府君

詔賜冠帶竹軒府君

有德長者振宇府君

明孝廉諱伯兄府君

(37) 『萬善同歸集』卷四(『大正藏』第四十八卷九八二頁c、『淨全』六卷八〇七頁下)。

(38) 『護法論』宋丞相無盡居士張商英述(『大正藏』第五十二卷六三九頁a)。

(39) 『蓮池大師全集』卷四(和裕出版社〈台灣〉)四〇一七頁。

(40) 『蓮池大師全集』卷二(和裕出版社〈台灣〉)二一六五頁。

(41) 『往生淨土傳』建長六年乘忍書寫與書 三冊 真福寺文庫(大須文庫)所藏。戒珠(九八五〜一〇七七)集と伝えわる。塚本

善隆著『日中仏教交渉史研究』第六卷「附録第一 真福寺藏

戒珠集往生淨土傳三卷」二八三頁を参照。

(42) 藤堂俊英「宋・日の蓮華勝会」(香川孝雄博士古稀記念論集

『佛教学浄土学研究』所収)

(43) 道端良秀著『中国仏教史全集』第九卷「第十一章 出家は大

孝である」を参照。

(44) 『負米図』初山宝林寺所藏。

(45) 藤原正纂訳『孔子全集』(岩波書店)の「孔子家語卷第二」

の二〇八四「致思第八」を参照。

- (46) 『皇明百孝伝』京都大学附属図書館所蔵。〈『獨湛全集』第四卷三八一頁〉。内表紙に「元禄十五壬午歳菊月吉辰 松葉軒利房刊行」(一七〇二年九月)と奥刊記に「元禄十五壬午素秋穀日 皇邑 書肆 今井重右衛門贈版」とある。
- (47) 『皇明百孝傳』一丁右〈『獨湛全集』第四卷三八五頁〉「孩提ノ之童無_レ不知_レ愛_二其親_一」は『孟子』「盡心章句上」十五を引用している。
- (48) 『皇明名僧輯略』一卷。『正統蔵』第八四卷三五八頁b)。
- (49) 『近代諸上善人詠』一卷(東北大学附属図書館所蔵)〈『獨湛全集』第四卷一九三頁〉。
- (50) 『近代諸上善人詠』の序文(原文返り点なし)〈『獨湛全集』第四卷二〇一頁〜二〇二頁〉。
- (51) 永明延壽、法眼宗。臨安府(浙遠江省)餘杭の人。二八歳で雪峰の法嗣翠巖令参について得度。その後天台徳韶の法を嗣いで法眼宗三祖となる。広順二年(九五二)雪寶山資聖寺に入り、のちに呉越の忠懿王の特請で靈隠寺に住し、また永明寺(後に浄慈寺)に移った。禅と念佛を兼修し、夜に別峰で行道念佛するのを常とした。
- (52) 『獨湛和尚念佛會文』京都法然院所蔵。〈『獨湛全集』第三卷四七五頁〉。
- (53) 『獨湛念佛會』法然院の「理函」に所蔵されている。〈『獨湛全集』第三卷四七五頁〉。
- (54) 『輓偈稱讚浄土詠』大正大学附属図書館所蔵。〈『獨湛全集』第三卷四四一頁〉。
- (たなか みのる まるこす 特別研究員)

〈Summary〉

The writings of Obaku monk Nembutsu Dokutan

TANAKA Marcos Minoru

The fourth chief monk of Obaku-san Manpuku-ji temple, Dokutan (1628–1706) came to Japan in the early Edo period with Ingen. As he spread Nembutsu practice by the Safuku Nembutsu Zu, he is called Nembutsu Dokutan. Although he belongs to the Chinese Buddhist tradition that practices both Zen and Pure Land, he has connections with eminent monks of Japanese Pure Land sect Jodo-shu, and left many books and pictures of Pure Land teaching. As a basic phase of the study on Dokutan, this paper has annotated his written works.

Key words: Dokutan, Obaku-shu, Ingen, Zen and Pure Land Practices